

## 第 2 章

### スポーツに対する関心の有無

スポーツを始める前の状況(スポーツに関心があるか否か)

## 1. 傾向

第 1 の視点(条件)は障害のある人がスポーツを始める前提条件といえる。これについては、インタビューした 100 名のうち、7 名(識別番号 16、40、42、63、78、83、92)を除く 93 名がパラスポーツまたはスポーツに関心や興味があった、あるいはスポーツや体を動かすことが好きだった、もしくは嫌いではなかったとみることができる。このことから障害のある人がスポーツを実施するためにはまず、スポーツに関心があることが重要な条件といえる。スポーツに関心がなければ次の視点(条件)である障害者スポーツに関する情報を探そうとしないであろうし、情報もたらされたとしても、スポーツへ気持ちが向くこともないと考えられる。また、後天的障害者で受傷前にスポーツにまったく関心がなかった人やスポーツ嫌いだった人が受傷後、スポーツにすぐに関心を持つことは難しいと考えられるためである。

## 2. スポーツに関心がある人、好きだった人、嫌いではなかった人の事例

まず、スポーツに関心があったり、好きだったり、嫌いではなかったという人の特徴を先天的な障害者と後天的な障害者に分けて見てみる。

### 【先天的障害者 0 歳～5 歳で障害を負った人を含む】

先天的障害者でスポーツに関心があった人に見られるタイプを二つに分けることができる。一つは体を動かすことや運動やスポーツが好きだというタイプ、もう一つはスポーツにそれほど関心があったわけではないが嫌いでもないというタイプである。いずれも、スポーツを始めるにあたってスポーツ実施に対する心理的ハードルが低いことが共通点である。これらに関係する要因としては以下の 3 点があげられる。①スポーツの実施に向けて家族の後押し、支援がある、②普通学校に通っていた人は体育には可能な範囲で参加しており、さらにそこでは体を動かすことや他の

子どもと違う方法で参加することに対するコンプレックスが少ない、あるいはネガティブな体験があってもそれに勝るポジティブな体験がある、③子どものころから体を動かすことが好き

### ① スポーツの実施に向けて家族の後押し、支援がみられる

識別番号 11、12、13、50、51、56、59、61、66、67、77、87、94、99、100 がこれに該当する。先天的な障害があり、家庭生活や学校生活に関して親をはじめ家族が支援していることは当然のことであるが、その中で子どものスポーツの実施に際して有形無形の後押しをしている場合が多々あった。識別番号 11 は子どものころから義足で、そのことがコンプレックスとなり体育の授業にはあまり参加できなかったものの、父や兄がスポーツ好きで、彼らがスポーツをしているのを見て自分も関わりたいと考えていた。識別番号 13 は学校体育のすべてに参加していたが、これは親が学校側と協議して体育への参加を依頼していた。識別番号 50 は兄の影響で体操教室やスイミングに通うようになった。識別番号 51 は姉の影響で小学校 5 年生からハンドボールを行うようになった。識別番号 56 は兄の影響で柔道を始め、識別番号 59 は兄の影響でスイミングスクールに通うようになった。識別番号 60 はスポーツ一家で 2 歳からスキー、5 歳からラグビーを始めた。識別番号 61 は父親のスポーツが好きの影響を受けて卓球を始めた。識別番号 66 は母親がスイミングスクールのインストラクターで 1 歳半からスイミングを始めた。識別番号 67 は生まれて 5 か月目から療育を開始した。母親が療育のプログラムの様子を見てこの子は泳げると判断し、その延長でスイミングに行くようになった。識別番号 77 の父親はスイミングスクールのコーチで 3 歳から父親が勤めるスイミングスクールに通うようになった。識別番号 87 は様々なスポーツに挑戦しているが、常に父親がサポートを行っていた。識別番号 94 は父親が海好きで、一緒に海に行くことがあったことからスイミングに通うようになった。識別番号 99 は姉の後押しを受け、バドミントンを始めた。識別番号 100 は小学校の時、父親の勧めで軟式野球チームに入った。

② 普通学校に通っていた人は、体育や部活には可能な範囲で参加しており、さらにそこでは体を動かすことや他の子どもと異なる方法で参加することに対するコンプレックスが少ない。あるいはネガティブな体験があってもそれに勝るポジティブな体験がある。

まず肢体障害についてみる。識別番号 4、12、13、33、49、51、58、60、61、76、78、84、87 は体に障害があるものの学校体育には参加していた。このうち、識別番号 4、12、13、33、58、61、76、78、84 は脳性麻痺や、骨形成不全、二分脊椎などの障害であり、他の生徒とまったく同じようにはできないが、授業の中でできる部分に参加したり、同じようにはできないが工夫をして参加していた。また他の生徒との体力差が出てきたときには参加できなくなるものが増える場合もあったが(特にチームスポーツにおいて)、その際はそれまでとは違った工夫で参加していたり、特別支援学校に移ることでこれを回避しているケースが見られた。識別番号 49、51、60 は上肢欠損あるいは機能障害や手指欠損で工夫は必要だが体育やスポーツの参加の大きな障害とはなっていなかった。

先天的な視覚障害についてみる。弱視で普通学校に通学していた識別番号 38 は小学校から高校まで普通学校に通った。体育では特に球技系の種目で苦勞した。しかし、これとは別にスイミングスクールに通い、スポーツに関して自分の居場所があったといえる。識別番号 54、62、65 は小学校まで普通学校に通い、中学校以降は特別支援学校に通い、視覚障害に配慮した競技を実施することができている。識別番号 85 は高校まで普通学校に通学しているが、ある程度視力があつたため体育や部活動の球技種目であってもそれほど苦勞なく参加していた。識別番号 86 は大学まで普通学校に通学し、短期間ではあるが、サッカーやミニバスケットにも参加した経験がある。運動会でリレーメンバーに選ばれたとき「障害があるのに何であいつが選ばれるんだ」という友人の言葉を聞いてから運動やスポーツに消極的になったが、中学時代には友人と一緒に卓球部にも所属している。就職後、視力低下が著しくなつてから盲学校に入り、ブラインドソフトボールをするようになった。識別番号 89 と 91 は幼稚部から高等部まで特別支援学校に通学し、体育の授業でゴールボールなど視覚障害者用のスポーツを経験している。

先天的聴覚障害の人についてみる。識別番号 80 は小学校 3 年までろう学校、その後普通学校に転校し、中学校ではサッカー部、高校でハンドボール部に入りプレーした。そののち、デフハンドボールと出会っている。識別番号 81 は幼稚部から特別支援学校に通い、スポーツが大好きでバレーボールや陸上部に所属した。識別番号 88 は学校期にはスポーツには無縁だったが(自分にはスポーツは難しいと思っていた)、障害者水泳部員募集のポスターを偶然見つけ「自分がスポーツをやっているんだ！」と認識でき、水泳を始めた。この場合はスポーツが嫌いではないものの自分には関係のないものと認識していたようである。識別番号 90 は小学校・中学校・高校と普通学校に通いバスケットや軟式テニスに取り組んだ。ろう学校専攻科に入学後にデフバドミントンを行うようになる。識別番号 94 は小学校からろう学校に進み、水泳を始めている。識別番号 96 はラグビーを始めたのちにデフラグビーの存在を知る。そもそもラグビーが好きで、障害のない人とラグビーをしていた。識別番号 99 は幼稚部はろう学校、小学校からは普通学校に通い、そこでバドミントンと出会う。識別番号 100 はろう学校中学部でバレーボールチームに入っている。聴覚障害では、このようにろう学校でデフスポーツに直接出会う場合、普通学校でスポーツに出会い、その後デフスポーツに出会うケースが見いだせた。いずれにしてもスポーツに関心があり、始めていることが分かる。

### ③ 子どものころから体を動かすことが好き

識別番号 4、68、62、81、100 らがこれにあたる。スポーツを始めた経緯について聞いた質問に対して「子どものころから体を動かすのが好きだったと答えている。この資質がその後のスポーツ活動を促進させたことは想像に難くない。

### 【後天的障害者】

次に、後天的障害者の障害を持つ前のスポーツ実施状況(関心の有無)についてみていく。後天的障害者 49 名のうち 46 名(93.9%)は障害が発生する前に学校の部活動や民間や地域のスポーツクラブでスポーツを実施していた。つまり、スポーツに対して何らかの関心があり、障

害発生後行うスポーツと同じかどうかは別として日常的にスポーツを実施していたことになる。このうち 10 人は「最初はどのようにしてスポーツを始めましたか?」という質問に対して、「もともと、運動やスポーツ、体を動かすことが好きだった」という趣旨の回答をしている。今回インタビューした多くの後天的障害者の皆さんは、そもそも運動に親しむ習慣があり、障害が発生したのちもスポーツを続けていることがわかる。

ただし、このうち識別番号 95 は小学校時代、週 1 回程度、サッカーやテニス、スイミングなどに通っていたが、目が見えにくくなったため、中学校では運動部に入らず、その後の体育の授業も積極的には参加しなかったと述べている。その後、大学で同世代の柔道をやっている視覚障害者と出会い、本人も柔道を始めた。障害が原因でスポーツ活動に積極的ではなくなったものの、視覚障害者のためのスポーツに出会ったことでスポーツを再開している。

### 3. スポーツに関心がなかった人、嫌いだった人の事例

#### 【先天的障害者 0 歳～5 歳で障害を負った人を含む】

先天的障害者でスポーツや運動に関心がなかった 5 名についてみる。識別番号 16 は先天的に重い障害(脳性麻痺)があり、小学校(一般学校)において、体育の時間、同級生が勝ち負けにこだわるようになり始めてから、人間不信に陥り、スポーツに関心が持てなくなっている。

識別番号 40 は先天的な視覚障害であり、視覚特別支援学校で柔道に誘われるが、やり投げのように人を投げるイメージしかなく、断り続けていた。中学校 3 年の時にバンド活動の一環として腹筋強化が必要だと感じ、体育の授業で経験していた柔道が役に立つと思い柔道を始めた。視覚障害に起因するスポーツのイメージの乏しさがスポーツに関心を持てなかった背景にあったといえる。

識別番号 63 は先天的な視覚障害であり、高校まではスポーツは無縁の生活を送っていた。小学校低学年までは普通学校に通い視覚障害があることで劣等感が強く、目立ちたくないという思いがあり、体育の授業もよく見学していた。視覚特別支援学校に移ってから「自分以外にも見え

ない人がいる」ということに救われた感覚があり、見えなくてもこれだけ動ける、ということで前向きな気持ちが持てた。その後、高校時代に友達の誘いを受けゴールボールを始めた。

識別番号 78 は先天的な肢体不自由(骨形成不全症)である。小学校・中学校・高校と普通学校に通学していた。学年が進むにつれ、他の生徒と体力差が出始め、体育は別メニューで実施していた。さらに障害特性から骨折しやすく年に 1~2 回は骨折をしており、骨折することが怖くスポーツには関心がなかった。その後大学在学中にビームライフルを知る機会があり、練習をするようになった。障害に起因する骨折を恐れスポーツに関心がなかったものの、障害の影響を受けにくい競技との出会いがスポーツへの関心を呼び起こしたといえる。

識別番号 92 は 5 歳の時に目の病気にかかり、小学校 2 年生で急激に見えにくくなった。小学校から、高校までは普通学校に通ったが、体育は困りごとが多く、特に球技ではボールが当たってメガネが割れるなど怖い思い出しかなく大嫌いだ。しかし、大学で視覚障害者向けのスポーツを体験したことにより、「見えなかったからできなかっただけで、それほど極端に運動神経が悪いわけではなかった」と思えるようになり、それ以降体育がすごく楽しくなった。その後はマラソンや、クライミングにも挑戦した。当時、マラソンで伴走してくれた人が今の夫である。目が見えていたころ、芸人が社交ダンスをやっているのを見て憧れるとともに、やってみたいと思うようになった。結婚後、視覚障害者の社交ダンスがあることを友達から聞き、たまたま居住地に近いところにブラインドダンスのサークルがあり、体験に行った。現在も週 2 回程度レッスンを受けている。

これら 5 人に共通するのはスポーツや体育において何らかの否定的な感情を持っていたという点である。障害のない同級生たちと一緒に配慮なく参加することでケガをしたり、勝ち負けにこだわるあまり、疎外感を持つに至ったり、あるいは視覚障害があることで正しいスポーツの認識を持てなかったことなどである。インクルーシブ教育、インクルーシブ体育、インクルーシブスポーツは共生社会実現において重要な概念ではある。しかし、そこには適切な配慮がなされるという前提条件が不可欠である。

できるだけスポーツ嫌い、体育嫌いを生み出さないよう、適切に「アダプテッド」することで参加者に否定的な感情を持たせないことは非常に重要な視点だといえる。いったんスポーツが嫌いになったり、無関心となるとそうした人たちにスポーツに参加してもらうのは非常に難しいためである。

最後に、スポーツに関心はあったが、体育は見学が多く、好きではなかったという識別番号 5 に触れておく。彼はスポーツには関心があり、父親とキャッチボールをしたり、野球を見に行ったりもしていた。リハビリテーションを兼ねて3歳から6歳までスイミングクラブにも通っていた。学校体育も低学年のうちには他の子どもと一緒に参加していた。しかし、高学年になり、体力差やできることに差が出てきたころから見学が多くなり、運動会も見学したり、運動会当日は休んだりすることもあった。障害が原因で実施できない内容なのに、配慮もなく、成績も悪くつけられ、納得がいかなかった。運動やスポーツに関心があってもやりたいのに、配慮がないために参加する意欲が失せてしまったのではないかと推測される。高校卒業後に体力づくりのために以前やっていた水泳を再開し、その後、陸上競技に取り組むようになった。「学校時代もスポーツは嫌いではなかったがやれなかった」という言葉は悲痛な叫びとして響く。

## 【後天的障害者】

次に、障害発生前にスポーツに関心がなく、日常的なスポーツ活動をしていなかったにもかかわらず、障害発生後スポーツをするようになった2人についてみる。

識別番号 42 はスポーツが嫌いなわけではなかったが、まったくやっていなかった。31歳の時に網膜色素変性症を発生していることが明らかになった。30代半ばころに、視覚障害当事者のサークルの活動で地元の図書館でサウンドテーブルテニスをやるという情報をもらい、参加したのが最初である。この時、パラスポーツ指導員から指導を受けた。その後、交流大会に出場し、好成績を残すことができ、この競技に取り組むようになった。その後は全国障害者スポーツ大会や地区のサウンドテーブルテニス大会に出場している。競技を続ける中でいろいろな人と出会うことに楽しさを感じている。2026年に青森で全国障害者スポーツ大会が予定

されている。青森には行ったことがないので、ぜひ出場したいと考えている。

識別番号 83 は 10 歳の時事故により右上腕欠損となった。その後の体育の授業は小学校・中学校ともほぼ見学だった。高校ではマラソンのみに参加した。スポーツは嫌いではなかったが、「体育は自分にはできないもの」と思っていた。学校を卒業して、就職してからもスポーツには関心がなく、たまに同僚とスキーに行くぐらいだった。旅先で馬に乗ってハイキングをする「外乗」があり、興味があったが、片腕では無理だとあきらめていた。夫から障害者でも馬に乗れるらしいという情報もたらされ、障害者も受け入れてくれる乗馬クラブを見つけた。その後、週 1 回のグループレッスンを受けるようになった。現在では契約社員（選手雇用）となり、週 3 日～4 日のトレーニングを実施している。

#### 4. まとめ

肢体障害、視覚障害、聴覚障害が先天的な人たちに共通することとして、障害の程度とスポーツを実施する場の特徴がスポーツ経験の評価（ポジティブかネガティブか）に影響を与えていることがあげられる。障害の程度が軽く、障害のない子どもと混ざってチームスポーツに参加するのに支障がなければその経験がネガティブな経験にはなりにくく、参加に支障があった場合、ネガティブな経験となるケースがある。そして、障害の進行や周りの子どもたちとの体力差が大きくなることがその原因となっている例が複数見られた。また、障害が重くても適切な配慮があり、周りの子どもたちからもそのことに対する批判等がなければ障害のあることに対するコンプレックスやネガティブな評価になりにくいといえる。逆に適切な配慮がなかったり、他の子どもたちからの批判（心無い言動）などが障害のある子どもにとって、スポーツや体育がネガティブな経験となることが示唆されている。

さらに、各特別支援学校では障害に配慮された体育や部活動が実施されている場合が多く、ネガティブな経験にはなりにくいことが考えられる。このうち、視覚特別支援学校では陸上競技や水泳のような個人競技

は個人で練習に取り組みやすい。ゴールボールやフロアバレーボール・ブラインドサッカー・サウンドテーブルテニスなどは、視覚障害特有の競技であり、多くの視覚障害者は特別支援学校で初めて経験することになる。

聴覚障害の場合には障害のない人のスポーツと大きくルールが異なる競技は少なく、普通学校から特別支援学校への移行、特別支援学校から普通学校への移行、学校卒業後のスポーツ実施にスムーズにつながる可能性が高い。肢体障害は障害の内容や程度が非常に多様であり、一概にまとめることが難しい。多くの場合、学校外でのスポーツの場があることが継続の鍵になっていると考えられる。

後天的障害者で障害発生後もスポーツを続けている多くの人は、障害発生前に日常的にスポーツを楽しむ経験を積んでいた。そうした経験が障害発生後もスポーツに向かう気持ちにさせている可能性がある。また、スポーツにあまり関心がなかった人で障害発生後スポーツを行うようになった人は友達がスポーツに誘ってくれたことがきっかけになったり、障害に合ったスポーツを体験することで自分にもスポーツができるという認識が持て、スポーツ実施につながった人がいた。先天的な障害者と同様に、障害発生後、障害に配慮のない形で障害のない人とスポーツをすることでネガティブな経験をし、スポーツから遠ざかってしまった人もいた。適切な環境で、障害に配慮されたスポーツを実施することでスポーツに対するネガティブな意識を持たずにスポーツを継続的に実施できる可能性が示唆されている。

(第 2 章担当：藤田紀昭)